



難聴児の音を聞く訓練

にとつて有益な人だということが分
かり、かかわり手が近づいても逃げ
ないで、側に寄ってくるような関係
になることです。

子どもはしっかりと人間関係を
足場に行動を広げていきます。不安
になったり、次の活動にふんぎりが
つかないときに戻ってこれる子ども
の生活の拠点にかかわり手がなれる
ことが大切です。

二 いろいろなコミュニケーション
生きていく上で、意思を伝えあう
ことはきわめて重要なことです。心
身障害児の多くは、ことばの発達が
遅れがちで、話しことばが出なかつ

たり、幼い感じのする話し方だつた
りします。

話しことばによるコミュニケーション
がスムーズにできないと嘆く先
生や保護者もおりますが、健全な大
人でさえも、手招きで人を呼んだり、
拒否の気持ちを話の内容でなく表情
や話し方で相手に伝えるといったよ
うに、話しことば以外の手段で伝え
る場合もあることを忘れてはなりま
せん。相手を分かうとする気持ち
が大切と考えます。

また、話しかけたことに對し、子
どもがそれらしい行動をすると、話
したことが理解されていると思つて
しまいがちですが、置かれたその場の全
体の雰囲気に対応しているかもしれ
ません。注意して見極めることが大
切です。

三 困ったことには

子どもは大人に比べものごとに対
する興味・関心は高く、さわつてい
じりまわしたり、しつこく質問した
りします。また、周囲の様子や他人
とのかわり方が分からないため
に、衝突を起こすこともあります。
そうした事態の処理を組み重ねなが
ら成長していくのです。

「困った、早く治さなくちゃ」とあ
せつては事態は少しもよくなりませ
ん。原因をよく見極め解決策を考え

ましよう。

四 豊かな個性として

心身障害児が健全な兄弟や友だち
と比べられては、劣等感が強まり、
意欲を失います。今の状態をありの
まま認め、そこからかわりの在り
方を考えていきたいものです。

人間は一人として同じ人はいない
のです。他の人と違うことを個性と
見るならば、心身障害児は個性豊か
な人間なのではないでしょうか。

個性には磨きをかけ伸ばすことが
できます。ただどしどし話し方をす
る人も、自分の考えを積極的に述べ、
相手を説得しようとする雄弁な人と
も受け取れます。心身障害児をどう
見るかが後のかわりと強く関係す
るのです。

第四章 学校では

元来、子どもにも障害があるかない
かにかかわらず、教育とは子どもに
ある型の行動を促したり、その反対
に抑制したりする、外部からの援助
を意味します。
特に学校においては、次の点に留
意して欲しいと思います。

一 全職員で教育を

心身障害児には、他の子どもと同

じように活動することが難しいこと
もあります。指導の責任を学級担任
にだけ押しつけるわけにはいきませ
ん。学級・学年を越えた全校的指導
態勢が必要となります。

担任は同僚の先生に積極的に意見
を求め、同僚の先生は担任の悩みに
応えるとともに、全職員が心身障害
児に興味を持ち、声をかけたり適切
な援助をすることが大切です。

二 安心できる学習の場

子どもが生活する学校、特に教室
が安心できる場所であることを分か
らせることは欠かせません。

教室にいるとホッとする人的な、
そして物的な環境作りが大切です。
これは、心身障害児と教師・友達と
の関係を整整できるかとともに、心
身障害児にあつた学習の課題を準備
できるかにかかってきます。

三 戸惑う教師も障害者

一口に心身障害児といっても、そ
の障害の種類、程度などは一律では
ありません。能力が一人ひとり違
いますし、反応の仕方にも個人差が
あります。個々人の実態にに応じて、最
も適切な教育の場を確保し、指導援
助にあたつては最善を尽くすことが
必要です。

心身障害児に初めて接すると戸惑